第８期 第７回 静岡市行財政改革推進審議会　会議録

１．日　　時　平成 31 年３月 20 日（水）　16：30～17：15

２．場　　所　静岡庁舎　新館８階　市長公室

３．出 席 者　【委員】

田形和幸会長、岩井泰次郎委員、植田眞委員、内山和俊委員、
小島孝仁委員、坂野真帆委員、鈴木貴子委員、西尾真治委員

【行政】

田辺信宏市長、大長総務局長、吉井総務局次長、三宅総務局参与、
吉永総務局参与兼総務課長、
中島観光交流文化局長、大石観光交流文化局次長、岡村文化財課長、
宮本登呂遺跡担当課長兼登呂博物館長、矢澤参与兼文化振興課長、
永田芹沢銈介美術館長、

〔事務局〕

遠藤総務課行財政改革推進担当課長、上原副主幹、兵庫主査

４．会議内容

行財政改革推進審議会からの答申（審議結果の報告）

審議会内容は以下の会議録のとおり

事務局：ただいまより、第８期静岡市行財政改革推進審議会から「歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～」の答申を行う。はじめに、審議会を代表して田形会長から田辺市長に、答申書をお渡しいただくため、会長と委員の皆様は前方に移動をお願いしたい。

田形和幸会長：平成30年10月16日付け30静総総第1927号をもって諮問のあった「歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～」について、本審議会として慎重に審議し、意見を取りまとめたので答申する。

事務局：続いて、答申の要旨について田形会長よりご説明いただきたい。

田形和幸会長：タイトルに「答申書の概要」とあるＡ３横のカラーの資料をご覧いただきたい。今回、本審議会では、先ほども申し上げたとおり「歴史・文化資源の活用及びその周

辺地域との連携による地域活性化について」審議した。

審議に当たっては、国指定の特別史跡である登呂遺跡など、全国的にも高い歴史的・文化的価値を持つ登呂エリアをモデルとし、現地を視察した上で、その活用方策について検討した。

まとめた提言については、「答申書の概要」の中段、緑の枠の中に記載している。特に、多くの人が訪れ、登呂エリアの魅力を感じてもらうための「②訪れた人が楽しむ」取組として、来場者が「弥生時代にタイムスリップしたようだ」と感じられるような『非日常的な景観・空間の演出』、登呂遺跡でのキャンプ等による宿泊など『特別な体験の提供』、集客力の高いイベントの誘致等による『「いつでも」「誰でも」「何でも」楽しめる仕掛け』、カフェ等の設置による『日常的に様々な人が集える「サードプレイス」としての場所づくり』と、具体性を持った多くの新しいアイデアが生まれた。

これは、様々な分野で活躍する委員が、それぞれの知見や経験を活かして自由に意見を出し合ったことによる成果であり、貴重な提言であると考えている。これらの提言の実現に当たっては、行政の発想や資金だけでは到底足りない。行政と民間、学校、地域住民等が、「地域活性化」という共通の目的の下、それぞれの持てる力を発揮し、協働することが必要不可欠である。そういった歴史・文化資源に関わる担い手を増やしていくためにも、行政が「まず何かやってみる」ことは非常に重要だ。本答申がその後押しとなり、「歴史文化のまち」としての静岡市の活性化につながることを期待する。

最後に、本答申をまとめるにあたり、委員の皆様をはじめ、市のスタッフ方々が真剣に意見を交わし、質問等に真摯に回答しご協力いただいたことに対して、会長として感謝を申し上げたい。

事務局：せっかくの機会なので、委員の皆様からも審議会を通しての感想等をいただきたい。

岩井泰次郎委員：今回この委員をやらせていただき大変勉強になった。いままで静岡に暮らしていて、青年会議所等の活動で地域のことを知っているつもりであったが、実際はあまりに知らない自分に驚いた。歴史文化の資源という点で静岡は本当に豊かなところであることを再認識した。そうした資源が登呂エリアにしても点で存在している。それらを線にし、面にし、そういう所で発信していく。また、物理的な点と線、線と面から、情報的な発信としてもネットやSNSを通じて様々な発信ができる。それらを通して、いままで点であったこのような資源が活かされていくのではないかと感じた。登呂エリアには私も小学校の頃から遠足等で足を運んでいるが、今後ますます素敵な場所になることを期待している。

植田眞委員：私もこの審議会に出席させていただき、非常にいろいろなことが検討できたと思っている。会長がおっしゃったように、非日常的な空間で二千年の時を超えてタイムスリップしたと感じさせることができたら非常にいいと思う。ぜひこれを目指して実行していただきたい。

内山和俊委員：今回の行革審に参加させていただき、多彩な分野から選出された委員の多

種多様な意見に触れて大変啓発された。審議にあたって登呂遺跡、芹沢銈介美術館、登呂遺跡公園を視察し、それらが持つ機能がまだ十分に活かしきれていないことを非常に痛切に感じた。長い歴史を持つ施設については、市民目線、あるいは専門家の意見を聞きながら定期的に見直しをする必要性を感じた。特に静岡市には駿府城公園がすぐ近くにあるが、NHK「歴史秘話ヒストリア」の歴史ニュース2018において2番目にランクインされた。静岡市から近い点もあり多くの人が集まる。秀吉公の石垣、家康公の石垣、金箔の瓦と、これらも非常に重要な資源であるため十分に活かしきっていただきたい。

小島孝仁委員：今回登呂遺跡には十数年ぶりに訪れ、自分が観光客として初めて静岡に訪れたとしたらどんな風に見えるかという視点で見たときに、すごくがっかりしてすぐに立ち去りたい場所だと正直に感じた。これは景観の面が大きい。では、観光客は登呂遺跡で何を見て、何を学んで、何ができるかを考えたときに、弥生時代の水田であれば写真に撮りたいと思うのではないか。また、そこで泥にまみれる体験は、他の田んぼでやるのとは違った意味を持つのではないか。遺跡の前で泥だらけになった写真を撮ることができる登呂遺跡であれば、観光客にとって何か特別な場所になるのではないかということで今回提案させていただいた。審議会を通していろいろなアイデアが出てきたが、何か一つでも実現させていただきたいと思っている。

坂野真帆委員：今回いろいろと勉強させていただいた。登呂遺跡と芹沢美術館は私も好きな場所なので、ポテンシャルは認めているところだ。それをどう生かしていくか、皆様のご意見を聞くなかで妄想が膨らんだ。行政だけでできる話ではなく、住民との連携が大切だという話があったが、民間も期待を持てるような場所ではないかと思ってはいる。ただ、そこで、民間がやってやろうと気持ちに火を付ける部分のインセンティブというか先導、火付け役を市の方が担っていただきたい。登呂遺跡だからということではないが、火起こしという部分は行政がやっていただきたい。任せる部分は民間に任せる、そのあたりの役割分担を考えていただけるとありがたい。市の方でもこの登呂エリアのポテンシャルをしっかり認めていただいて活用していただきたい。ここだけではなく歴史資源は静岡市にはたくさんある。古代から現在までずっとつながって歴史資源はあるので、それぞれが生かされるようになっていけばいいと思う。

鈴木貴子委員：この半年間かけて、市の歴史、そして観光資源について改めて学ぶ機会になった。この委員を任命される1カ月ほど前、海外の方から静岡に来たいと連絡があり、どこに行きたいか問合せしたところ、挙がってきた場所の一つが登呂遺跡だった。なぜ彼女が登呂遺跡というところを知っているのか驚いたのだが。この委員として実際に現地を訪問した時に、彼女にどう案内したらいいか少し不安になった。インバウンドがこれまで議論されていくなかで、まだまだ課題はあると思うが、海外の方にとっても登呂遺跡は関心がある。彼女になぜ登呂遺跡がいいか尋ねたら、東京から1時間で非日常的、この近代的な日本の中ですごく歴史的というか、京都の二条城や金閣寺のような派手さはないが、二千年前の日本人の生活文化を見ることができてとてもよかった、そ

して自分たちの歴史についても関心を持つきっかけになった、いろいろな意味でポテンシャルがあるという話をしてくれた。いま日本の各市町村はインバウンド対策を一生懸命やっている。さらに「ポスト 2020」でインバウンドのお客さんがどのような形で増えていくかが課題になっているなかで、リピーターのお客さんにぜひ静岡に来ていただき、その際に登呂エリアやそれ以外のところにも足を運んでいただけるようなことができればいい。また、静岡の若い人たちにもこの魅力を伝えることができれば、街づくりとしてのイベントが企画されたりして、もっと盛り上がっていくのではないかと思う。

西尾真治委員：１年間ありがとうございました。今回テーマが歴史文化資源ということで、従来は保全の対象だったと思うが、これを活用して地域の活性化に結び付けていこうということだから、非常に発想の転換が必要で、行政は苦手な分野だったと思う。それに対して非常に斬新なアイデアが出てきて刺激的な会だった。逆に、受け取った行政はとても大変だと思う。どうやって実現していくかがこれからの市の課題だと思う。その中で二つ申し上げたい。一つは、優先順位を付けてやっていかなければならないが、今回、一つのストーリーというか、ロジックで全体を組み立てた提案になっている。ストーリーをつけてロジックを組み立て、やることを絞り込んでいくという視点が重要だ。もう一つは、なかなか新しいことに取り組むのが行政では難しいが、まずやってみる。実践重視の文化に行政のやり方を変えていく一つのきっかけになると思う。やったことの効果を検証していく方法をあらかじめ織り込んだうえで、まずやってみる。この取り組みは市民が誇りを持てるというのが一つのポイントだと思うので、できるだけ市民を巻き込んでいくような仕方も検討していただきたい。

事務局：それでは市長からひとことお願いしたい。

田辺信宏市長：まずはお礼かたがたご挨拶申し上げたい。ありがとうございました。チーム田形は多種多彩なそれぞれの分野で活躍されている委員の皆様に集結いただいたチームなので、このような答申書という枠を乗り越えるような提案をいただいたと感謝している。キーワードは規制緩和だ。民間活躍を受け入れる際の規制が現行の法律体系と両立する形でどれだけ緩和できるか、受け皿を作れるか、その起爆剤になるような今回の答申書をいただいたと理解している。以前話をしたが、この行革審のインパクトは他の審議会の中では抜きん出ていて、議会も一目を置いている。この行革審の方向性があれば、市政もこれはやっていいのだというような発想になってくる。西尾委員が、受け取る方の行政は大変だとおっしゃったが、私からすると羅針盤をもらったような気持ちでいる。市民からもいろいろな提言を受け取るが、それに権威がないと議会も一目置かないし、財政局も一目置かない。しかしこの審議会の提言には権威があるので、羅針盤を与えていただくようなものだ。私が職員にいつも問題提起しているのは、「できるかできないか」という判断基準で仕事をするのではなく、「やるかやらないか」という判断基準で仕事をしてほしいということだ。できるかできないかという判断基準だと、できない理由をたくさん並べ立てるのは非常に得意だ。だが、市民が求めているのはそういうことではない。やるかやらないか。やってみせて、結果的にできないことがあるかも

しれないが、それは仕方がない。でも、「やるかやらないか」ということがこれから市民に求められる行政に対するバリューだと思う。そういう意味で、やってもいいのだと思わせるような答申をいただいたのは大事にしたいと思う。実は、どんな諮問をしようかということを担当課といろいろと話した。私はもっと幅広な、駿府城公園に隣接する旧青葉小学校跡地に2年後に歴史文化施設ができるから、ここを核にした規制緩和を中心とした民間活力の導入という風に提案したが、大長総務局長が登呂遺跡にものすごくこだわりを持っていた。駿河区長を歴任しており、トロベーを駿河区全体の応援隊長にした立役者だ。登呂遺跡を何とか求心力のある場所として復活させたい、小島委員のイメージを払拭させたい、そういう大長局長の思い入れからこの諮問になった。これで良かったといま感じている。一点突破全面展開だ。これをうまく活用していく。規制緩和ということだ。芹沢美術館と登呂博物館と遺跡そのもの、それらを三位一体でやっていくことによって相乗効果が出てくる。この公共的な施設群と民間の活力を生かしていけばいい。先ほど小島委員が、貫頭衣を着て泥んこになるような、登呂遺跡でしかできない体験の話をされたが、泥んこになる爽快感の中でそのまま用宗に行って温泉に入ってもらう。こういうことが「コト消費」志向のこれからの観光客の受け入れにもなってくる。そういう一つのきっかけにしていきたいと思う。これから少し時間があるので、私と議論をさせていただきたい。

事務局：あと5分程度市長の時間があるので、よろしければ意見交換とさせていただきたい。

田形和幸会長：積極的にやっていただくのが一番だ。これからまだ4年間あるので、自信をもって実現に向けて頑張っていただきたい。

田辺信宏市長：所管をした総務局長、そして今回のボールを受け取る観光交流文化局長ともに、人生100年時代のなか来年度も再任用で役所の中にいる。ぜひ一言ずつコメントをお願いしたい。

中島観光交流文化局長：ベースとして持っている土地のパワーと、そこで誰が何をしているかと市民がイメージできるかが勝負だというのは、小島委員がお話してくださったとおりだと思っている。その時、どういう切り口でそれがインスタやYouTubeに上がっていくのかが観光地の勝負どころだ。それを具体的に技術的にやらなければならない。最終的にはどういう空間を作っていくかということになる。登呂博物館の館長はすごくやる気のある男だ。いま棚卸をしてほしいと言っている。たぶん泥遊びはできる。でも私たちには15センチは掘っていいが1メートルは掘ってはいけないということが分からない。だから、できることの棚卸をしてほしいと言っている。伸びしろをきちんと整理したうえで、乗ってくれる人を探す、もしくは自らやる、という形で具体的に進めていければ、答申書の写真にある南池袋公園のようなシーンや泥遊びのシーンが登呂らしい形で実現できると楽しみにしている。うちのスタッフはその気になっているので、引き続きよろしくお願いしたい。

宮本登呂博物館長：民間の視点からの斬新なアイデアをいただいた。あとはいかに実現す

るかということだが、役所のいろいろなセクション、専門家の知恵を借りて、登呂博物館だけで頑張るというよりか、役所全体で解決策を見つけていきたいと思っている。

田辺信宏市長：おっしゃるとおり、保全から活用ということがトレンドだ。今月いよいよ世界文化遺産の構成資産である三保松原に観光客を受け入れるためのビジターセンターができる。活用していくということで、インバウンドで利用していくのみならず、松原あっての三保松原だから、これ以上松枯れをさせないための研究所もセンターの中に兼ね備えている。こういうネットワークがこれから登呂にもここにも必要になってくるだろう。これを所管しているのが文化財課長で、どうやって保全のみならず活用していくか頑張ってくれている。文化財課長からも一言いただきたい。

岡村文化財課長：今回私たちも、実際にやるということについて、今後考えなければならないとひしひしと感じた。イメージでこういうことをやりたいとは考えていたが、実際に動いていないということはやっていないことと同じだ。そうしたことが、小島委員ががっかりしたとおっしゃったことにつながる。やるかやらないか、ということで、「やる」という方向に舵を切りたいと思う。いままで守るだけだったものを活用するという方向に舵を切りたい。

田辺信宏市長：私の代になって、文化振興課がものすごくクローズアップされた。すごく忙しくなっているし、私からのボールもばんばん投げられる。まちは劇場というプロジェクトも始動したし、言ってみれば文化力を経済力に変える、地域資源を稼げるものにしていくというお題の中でいままでにない発想の中でやらなければならず、非常に苦労されたと思う。文化振興課の矢澤課長はいかがか。

矢澤文化振興課長：内山委員がおっしゃった持つ機能を生かし切るというご意見について、確かに芹沢美術館は建物も世界的に有名な方に設計していただいたものであり、所蔵する作品も収集品も類を見ないほどの量と質を誇っている。しかし、いまは市民の方にも認知度がだんだん低くなってきている状況だから、いただいた提言を受け止め、単館ではなかなか難しいと思うが、登呂博物館あるいは他の施設と連携をした形で新たな認知度の向上に努めていきたい。

田辺信宏市長：中島局長から満を持してこのバトンを受ける大石局次長、責任は重大だが、決意の一端をお願いしたい。

大石観光交流文化局次長：審議会には何度か私も出させていただいた。真剣な議論をいただきありがとうございました。その中で記憶に残っているのが、景観、空間づくりだ。なかなか行政ではそこまで考えないことなので非常に印象に残っている。小島委員からスライドを使って実際に木で覆われた景観を見せていただき、こういうことなのかと実感できた。答申書にあるように、まず何かをやってみるということは非常に重要なことだ。さっそく具体化していきたと思っている。

田辺信宏市長：財政課長、財政部長経験者なので、予算はたくさん引っ張ってくれると期待している。大長局長からも一言お願いしたい。

大長総務局長：半年間ご審議いただきありがとうございました。市長からもご紹介いただ

いたが、私は3年前に駿河区の区長を務めた。その時に登呂博物館のキャラクターであるトロベーを駿河区の応援隊長にした。その時にトロベーをお借りしていろいろな活動をしたが、やはり登呂博物館が少し寂しい状況にあることは実感していた。駿河区を盛り上げるためにトロベーを使い、相乗効果で登呂博物館の方も活気が出てきて二つがお互いに盛り上がってくればいいと思って活動してきた。しかし、なかなか登呂博物館に人の足が向いてこないということがあり、今回このようなご審議をいただいたわけだ。先ほど岩井委員から子供の頃に遠足に行ったという話があったが、私も中島に住んでいて、子供の頃に遠足で登呂遺跡に行って楽しかった思い出がある。いま登呂遺跡に行くと、のんびりした空気が流れてはいるが、やはり人が来ていないということで寂しさを感じている。今回いただいた提言を実現させて、あそこに子供たちの声が響きわたり、多くの人が集うような場所になればいい。まずはやってみることが大事だ。できることがあればさっそく取り掛かっていきたい。総務局がやるわけではないから、局間連携ということで、市全体で提言実現に向けて取り組んでいきたいと考えている。

田辺信宏市長：行政経験者である内山委員がいた頃とずいぶん行革審のイメージが変わったという印象を持っているのではないか。

内山和俊委員：今回委員の皆様の顔ぶれを見るとすごく多彩なメンバーが入っている。私は行政経験者だが、お恥ずかしい限りだが初めて知ったことも結構あった。目からうろこが落ちた感じで毎回の審議が楽しみだった。これからもいろいろと皆様から知識を吸収して他の活動分野に生かしていきたい。

田辺信宏市長：一番遠くから来た西尾委員、もう一言何かないか。

西尾真治委員：いまのやりとりを聞いて、非常に市役所の中の風通しの良さを感じた。これがただの提言に終わらないで、実際に動かしながらさらにいいものに改善していかれることを来年度以降もぜひ見ていきたいと思っている。

田辺信宏市長：ありがとうございます。西尾委員にはマニフェスト研究所以来すごくお世話になりご指導いただいた。公募委員の皆さんはいかがか。

植田眞委員：いま皆さんからお話があったように、提言のその実行が、やはり一番重要だ。ぜひ進捗状況を我々にその都度見せていただけると非常にありがたい。これはおそらく何年もかかる話だと思うから、どういう形で実際に動いているのかを見せていただけると、これは我々が答申したときのものが動いているのだと、我々にとっても非常に力になる。ぜひ進捗状況を出していただきたい。

田辺信宏市長：それはPDCAを回していくという意味で非常に重要だ。前の岩崎会長の時の答申の目玉は、人生100年時代において、60歳以上のまだ社会貢献したい、働きたいという方々のワンストップの窓口を作って生産性を上げるべきという内容だった。いろいろと議論を経て、商工会議所のご協力をいただき、すごく珍しいことだが、雇用政策をやっている経済局と、健康長寿をやっている保健福祉長寿局が縦割り行政を打ち破って局間連携し、2局に民間を加えた体制でこの6月に役所の中に窓口を作る。ネクストライフステージ窓口のようなネーミングで実施する。そういう風に委員の皆さんにフィ

ードバックをして、自分たちの議論がこうやって行政に反映されていると達成感を持ってもらえるように努力をしているつもりだ。この答申もぜひフィードバックをしていかなければならないと思っている。その辺をどうシステマチックにやるか。担当課長はどうお考えか。

遠藤総務課行財政改革推進担当課長：市長からあったように、29年度にいただいた行革審の答申については30年度に経済局と保健福祉長寿局と民間の方に入ってもらい、検討会を開いて協議していただいた結果、31年度から実際に雇用と就労を結び付ける窓口を作ることになった。それを、本日お配りしている行革後期実施計画の冊子の中に、高齢者の就労促進ということで取組を掲載している。今回の答申についても、さっそくできることからやっていくべきと提言をいただいていることから、観光交流文化局、それ以外にも関係するところと協力してできるところから取り組みを進め、計画は毎年改定していくため、その中で反映させていきたいと考えている。

田辺信宏市長：鈴木委員はいかがか。

鈴木貴子委員：この半年間、委員の皆様からのいろいろな意見を聞き、静岡は本当にいろいろなポテンシャルを持っていることを実感した。それをいかに市民目線で関わっていくか。答申書にシビックプライドとあるように、若い人たちに静岡の良さを伝えることによって人口流出を防げると思うし、若い人たちが静岡に戻って来るきっかけにもなると思う。あるいは静岡に定住しようと、こんなに素敵で魅力的な場所が東京から近いところにあるので、そういう部分で活用することができればいい。

田辺信宏市長：私にとって、公募委員に手を挙げてくださるということは本当に嬉しい。行政に関心を持ってくださる。来月に選挙があり、投票率を上げていかなければならないが、自分たちの住んでいる地域に関心を持って手を挙げてくださることは私たちにとって大変有難い。坂野委員も、清水港への客船誘致のための委員会で知り合った関係で今回お願いした。

坂野真帆委員：クルーズ船を中心にして、特に海外の方が来静されていることを実感している。街を歩いていても海外の方と向き合うことが増えたと感じる。私の事務所は浅間通り商店街にあるが、浅間さんにバスが何台も入っている。オプショナルツアーに参加されていないような方がふらふらと歩いているのもよく見かける。弊社のツアーにもお見えいただくが、静岡だからお茶だとか、鈴木委員がおっしゃったように登呂遺跡にピンポイントで行きたいとか、海外の方、外の方のほうが資源のことをよく知っていらっしゃるというくらいの感覚もある。そういう方たちに来ていただけるような仕組みも大切だと思うが、来た時に受け入れる側にそこまでの意識がない、そこまでの準備がないと、来ていただいたことが仇になるということもあるので、難しいかもしれないが、そこは両輪でやることが必要だ。来ることによって意識が変わる、住む方が楽しんでいるから来たくなる、その辺りをバランス良く両方とも育てていくということをお願いしたい。

田辺信宏市長：おっしゃる通りだ。まずは来てくださった方々の静岡での滞在時間を長く

する。できれば宿泊をしてもらう。そういうことにつながってくれるといいと思う。青年会議所同期の岩井委員はどうか。

岩井泰次郎委員：先ほど市長がおっしゃったように規制緩和が突破口だと思う。いままでできなかったことが自由に経済活動としてできるようになる。そこに、点として存在していたものを活用できるようになればもっともっとよくなる。素材はたくさんあるのだから。あとはどういう調理をするかだ。調理をするときに足かせとなっていた規制をどう緩和するかは行政の皆様にお力を借りたい。そこのタガが外れれば美味しい料理ができるのではないか。ぜひ引き続き市長にはよろしくお願いしたい。

事務局：話は尽きないと思うが、時間になったので審議会からの答申はこれで終了する。ご審議いただきありがとうございました。市長は公務のためここで失礼させていただくが、続いて委員の皆様には行財政改革の後期実施計画について事務局より簡単にご報告させていただきたい。

≪略：事務局説明≫

事務局：以上をもって第７回行財政改革推進審議会を終了する。

静岡市行財政改革推進審議会

田形和幸